

授業方法について独自に工夫していること【人文社会系】

語学のコミュニケーション授業なので、小人数でいろいろな活動ができる。

この授業はほとんど英語で行われた。

地誌概説 I では、事前に資料の配付を「学びネット」を利用した。大半の学生はあらかじめそれを印刷して授業に臨んでいた。事前に資料を見ることで授業内容を予習することも可能であると考えたからです。しかしアンケートの自由記述には、「全員が家にネットワーク環境を備えているわけではないので印刷して配布してほしい」との指摘・要望があった。家にネットワーク環境がない場合、学内のネットワークを利用すれば良いと判断しています。100人以上に対して数ページのカラー印刷をした資料を配付することは困難であるから。その他の授業に関しては、独自の工夫といえるものはありません。

教員免許状を取得するのに必修の科目であるため、教員になった時に困らないような知識が身につくようテキストを選んでいる。また、履修者数が多いので、一方的な授業になりやすい。2、3回に一度ぐらいは発言できる機会を作っている。

国文学演習では、発表のための事前相談を義務化している。この事前相談において、どのような作業仮説を設定するのか、どのような資料を調査するのか、などのディスカッションとガイドを行う。学生によって時間は異なるが、一人(あるいはグループ)あたり、最短50分から最長4時間程度の相談時間を設けている(個人・グループの相談回数は、およそ2回から3回)。平均時間を計算したことはないが、ひとり(あるいはグループ)あたり1時間半から2時間程度だと認識している。また、独自の質問・感想シートを用意している。

社会学の調査方法について、なるべく実践的に学ぶ形をとるようにしている。またその結果について分析し考察することについても、具体的な実践事例をもとにすることで、結果について自らのリアリティ感覚と対照しながら行うことができるようになるとともに、自分が行ったのではない様々なメディアや官庁などの調査結果を見てゆくときのリテラシーを高めることができるよう考えている。また討論によって、多様な視点からの分析や考察ができるよう図っている。

自著を教科書にして、自作の動画講義も活用している。

班別のレポートなので、最初の班については、研究室に呼んでレポートをどう作成するか指導している。

文学の流れを話す回を半分、上代・中古・近世各時代で論じた自説紹介の回を半分として、深く学べるよう工夫している。

卒論を英語で書くための書き方について、過去の卒論を参考にしたりしながら、演習形式で授業を行っている。また、毎回、自主学習を確認できるように、英語表現等の小テストも行っている。

物事の多様な見方を理解すると同時に、自分の持っている価値観を自覚し表現することを期待して、ペアになって意見交換する機会を多く設けた。

授業前半で、三種類の季節認識(節月・暦月・自然暦)の相違点及び相互関連性について説明し、それを踏まえて古今集四季部の短歌読解をさせ、そこに歌われる季節概念が三種類の季節認識のいずれに拠るものであるかを識別させつつ、短歌の精確な読解をさせた。その際、句読点の重要性を具体的に悟らせるべく短歌の読解の際も原文に句読点を打たせ、句読点の読み方・打ち方を常に皆でチェックした。また、文脈を認識すべく傍線を付すなどの工夫もした。授業後半で行なった古今集恋部の読解では、句読点を付す方法だけでは不十分で、細切れにされた文脈を捉える為に傍線を付す方法を多用した。また、レポーター以外の学生が単なる聞き役に回らないように、毎時限発言回数を記録し、発言を促した。

100名近い履修者に対する講義だったが、毎時間授業後に必ず200字の意見文を提出してもらうようにした。
次の時間の冒頭に、必ずその意見文をいくつか紹介したり、グラフにして学生に提示するなどして、学生の意見へのレスポンスを施すように心がけた。

学生の発表に補足する形で講義形式に授業を行い、実際に書くことで体験するという、調査発表→講義→体験の授業内実施を意識して行った。

今年度は「アメリカにおけるジャズ音楽の歴史」について講じたが、全体としてジャズの発達過程が一望できるような歴史的な視点と、個々のジャズ・プレーヤーの卓越した技量に基づく実際の演奏の素晴らしさといった具体的な視点の両方をバランスよく提示することを心掛けた。

異文化コミュニケーション論は100名受講の1年生向けの授業であり、知識をつけてもらうために講義が大半を占める。ドキュメンタリーのDVDやネット動画も使って飽きない授業を心がけている。(ただし、授業者の力不足もあるが、全員を授業に集中させるのは至難で、態度の悪い受講者にはストレスがたまった。現代学芸課程の改組転換に伴い、授業が終了したことは授業者には幸いであった。)

言語学研究IIについては、今年度は使いやすい教科書が発売されたこともあり、採用した。平易な記述なので、授業外などに読んできてもらい、説明が必要な部分のみ詳しく解説した。ほぼ毎回、小テストを実施した。学んだことの確認と応用のためのテストであり、暗記を必要とするものではないので、内容によっては教科書を見ながら考えてもらった。

今期の3年生用政治学ゼミについては、日本語文献を読み、討論力をつけるためのゼミ(現代学芸用)、および、英語の研究書を読み通すゼミ(教員養成課程、自己評価対象授業)の二つを開講することができた。この二つのゼミを通して、読解力・討論力・プレゼン力・会議運用能力などを総合的に高めていきたいと考えていたが、授業コマ設定のミスにより、教員養成課程の学生にとっては、現代学芸用ゼミが必修授業と被ってしまい、片方だけの受講とさせてしまったことは大きな反省点である。

来期については、現代学芸用ゼミと教員養成課程用ゼミの中身を入れ替えて開講するほか、一方の必修と重ならないよう配慮したいと考えている。

これらの授業の形式は、民俗事例をVTRで具体的に示しながら講義を進めるというものである。毎回、授業の始めに、その回の内容や映像(事例)のとらえ所など、授業の目標を明確化する。また、授業の受け方、ノートの取り方、授業と試験の関係など、第1回目のオリエンテーションにおいて丁寧に説明する。ただ映像を見せるのではなく、映像をとおして民俗事例の具体的な理解をめざすとともに、いかにノートに内容を定着化させるかにも、力点を置いている。授業のノートは取材ノートに相当するものとして、最初の数回は授業をとおして、どのようにノートを作成するかの説明に時間をかけている。

できる限り、日常の言語活動との関連で授業内容を捉えることができるよう、課題や話題を用意している。

「おくのほそ道」という作品を半期で全文読み通すこと、全15回という回数で収めること、二十五人全員に人二回ずつ発表の機会を設けること、の3つの条件をクリアするために、計画や発表方法の指導などに苦心した。

教員からの一方的な受け身の学習になるのではなく、学生自身の主体的な学びとなるよう、課題解決と発表、質疑応答の機会をどの授業にも何らかの形で必ず設けるようにしている。
受講人数が多い場合には、個別の学生の発表に対してコメントする時間が制限されてしまうのが苦慮している点であるが、可能な限り、発表させっぱなしではなく、それに対するフィードバックを与えるように留意している。
また、発表を行うだけでなく、ともに学ぶという観点から、受講者同士が発表に対して意見交換を活発に行える環境づくりを最も意識している。

基本的な事項を教えて上で、学生に考えさせるような発問を与え、定期的に討論のための時間をとるようにしている。

動画を多く活用し、力学を実際の場面から、理解できるように示した

講義はともすると一方通行になりやすいので、適宜学生に質問を出し、それについての質疑応答を展開することで、講義をさらに深めていくことを意識した。その場合、当該学生と一対一になりやすいので、教室全体で問題を考えてもらうよう工夫した。

学生自身に中国の新聞サイトを閲覧して、講読文章を選択させることで、普段あまり見ることがない中国の新聞サイトを閲覧する機会を確保した。

時折グループワークを取り入れ、一人で考えるだけでなく考えあう作業を行った。
辞書を引く習慣がついてないため、辞書を持参させ、実際に辞書を引く作業を繰り返すことでその漢文学習における必要性について実感させた。

教育学部であるため、初学者ばかりだと想定し基本用語や基礎概念を繰り返し替えし伝えることは意識している。
また、1年次必修の授業では工場見学を行う、上級生の科目では外部の実務家を呼んで講義してもらうなど、机上ではなかなか分かりづらい経済について、なるべく実感を持ってもらうことも意識している。

本講義では、おそらく高等学校までの社会科ではほとんど触れられることがなかったと思われる中東欧の現代史を扱ったので、なるべく多くの地図・画像をスライドで示して講義を行った。また配布する資料に関しても講義を受けるにあたって知っておいてほしいことを事前に配布して講義内容が理解しやすくなるように努めた。

・その時間に話すべき内容を明確に整理する。
・提示する資料を的確にセレクトする
・板書の内容をしぼり、まとめておく
以上の準備の上で
・なるべく学生に分かりやすく講義するよう努力するなどの当たり前のことを、しっかりとやっていくように注意することがすべてである。

教科書に準拠した授業であったため、まずは教科書の内容を正確に理解できるような配付資料の作成を心がけた。しかしそれだけにとどまらず、実際の日本の法制度についての理解を深めてもらうため、資料には写真などの視覚的な情報も盛り込み、講義では身近な問題意識を持ってもらえるような話題を提供した。

基礎を繰り返ししっかり説明すること。具体的事例と理論的解明がうまくかみ合うように、講義の流れ、組み立てをよく練ること、コメントシートを活用し、受講者とのやり取りを促進すること。

司馬遷『史記』についての授業では、学生自ら『漢書』の当該部分との比較を行って、『史記』と『漢書』の執筆態度の違いを考察し、意見交換を行った。

内容が漢字についてだったので、改めて漢字に興味を持ってもらえるように、新漢字を自分で創作する課題や、複数の辞書を引いて難漢字を調べる課題を出した。

発表担当者以外の学生を積極的に参加させ、問題意識を持たせるため、毎回コメントシートに意見・質問・感想を書かせている。

問題点等を共有するため、コメントシートは毎回、全員分を全員にコピーして配布し、補足説明等を行っている。

くずし字の指導においては、机間巡視して質問を受け付けやすい環境をつくるよう務めている。

発表担当者には、発表前週までにレジユメをメール添付で提出させ、改善点などを指導している。